

ちえなっぶ

※ちえなっぶは「CHIN UP・前を向いて」の意味です

《特集》

アーチル療育セミナー

- ・今後10年の支援を見据えて
- ・地域で誰もが安心して暮らすために

《かけはし》

高校情報交換会

「理解・未来・自立」を行っています！

■ 支え合いのつながりと力

私達は、誰もが自身の選択と決定による社会参加が保障され、自立した地域生活を送ることができるよう、社会全体で支え合う仕組みづくりにあたってきています。日々の「育ち」と「暮らし」の中で、本人やご家族、支援に関わる方々、交流する人達が連携協働し、それぞれに役割を果たして、効果的に活動していけるような関係・環境づくりです。

支援に携わる方々がつながり、連携することで、支え合う力が格段に高まり、また、広がることが期待されます。日々、支援を行うことを通して、お互いに「知る」と「知ってもらう」を重ねることで、理解と信頼を深め、立場や組織が異なっても、それぞれの力を持ち寄って「協働」できるようになると考えます。今、何に困っていて、どうすれば乗り越えるができるのか、そのためにそれぞれが何をするのか、といった展望が見られるでしょう。また、ひとりや一機関ではなかなか考えつかないような画期的なアイデアが生まれる可能性があり、支援者のエンパワメントと言えます。

今回特集のアーチル療育セミナー講話の中でコンタクトパーソンのお話がありました。「かけはし」では、コンタクトパーソンであります先生方の交流の場「高校情報交換会」をご紹介します。

北部アーチル所長 佐久間 幸一



作品名

「ゆゆの編み物作品集」

ゆゆさん作

(作者のコメント)

編み物歴が長いので、
こんなにたくさんになりました。
まだまだ増やすぞお～(”^▽^”)



平成26年3月1日、仙台市役所（本庁舎）の8階ホールにて、平成25年度アーチル療育セミナーを開催致しました。第1部では、新潟県はまぐみ小児療育センター所長の東條恵（とうじょう めぐむ）氏をお招きし、「発達障害児者支援の今後について～今後10年の支援を見据えて～」というテーマで「発達障がい診断に偏りすぎない見立てと支援ーこどもの生活環境と愛着パターン・スタイルー」と題してご講話いただきました。第2部では、「今後の発達障害児者支援の方向性を考える～地域で誰もが安心して暮らすために～」というテーマのもと、つどいの家・アプリ管理者の渡部正史（わたなべ まさふみ）氏、認定NPO法人みやぎ発達障害サポートネットの猪股絵理子（いのまた えりこ）氏をシンポジストにお招きし、北部アーチルの所長とともに、宮城教育大学の野口和人（のぐち かずひと）教授のコーディネートでシンポジウムを行いました。

第1部 講話

1 コンタクトパーソンの充実を

新潟県では、早期の気づき（医学的診断を含む）をキーワードに、（個別の）相談支援ファイルを作成し、保育・教育・福祉ベースで、「福祉マインド」のもとで「途切れない支援」を目指しています。そして、今後は丁寧なコンタクトパーソンの充実が重要になってくると考えています。また、発達障害があるうとなかると、人に対する安定した愛着スタイルの確立が重要であると思います。この部分を欠落させたかたちで、医学診断に偏りすぎているのが今の現実だと思います。診断がついて、保護者も支援者も、「これには視覚支援が良い、構造化が良い、SSTが…」という（スキル面の）ことばかりに目が行きやすい。でも本当は、家庭の中でも、家庭以外でも、特定の人との愛着

スタイルが順調に構築されていくことが重要になります。特に自閉症児者には、社会・世間とコンタクトをとるための信頼できる人（コンタクトパーソンの存在）が必要だと言えます。それは家庭では親になりますし、学校では先生やスクールカウンセラーであったり、特定の友人だったりします。

2 愛着障害スペクトラムという考え方

最近では、多数派（定型発達）・少数派（発達障害）という言い方をしますが、その中間層にあたる「グレイ」が増えていると言われています。これまで虐待等で極端に愛着パターンが不安定な方は、反応性愛着障害と呼ばれてきました。でも実は、そこまでではないが、不安定な愛着パターンを持った人が多くいて、愛着障害もスペクトラム概念で考えていくことが発達障害のあるなしにかかわらず必要です。発達障害の診断だけでその人を見ることは適切ではなく、養育環境も含めて考えることが重要になってきます。診断の正確性にこだわらず、「〇〇支援モデル」で考えることが大切です。

（補足説明）現在、発達障害はスペクトラム概念を用いて説明されることが多くなっています。発達障害の特性は、特定の基準線で白黒つけられるものではなく、濃淡があるという考え方で、ある診断基準では、自閉症スペクトラム障害（ASD）という単語が用いられています。

3 愛着関係の活性化を

発達障害の支援を掲げる限り、現代生活の問題と、子育て支援の内容にも触れることとなります。現代の生活では、子どもがテレビ・ゲーム・インターネット漬けの生活に陥りやすく、家族との会話や一緒に遊ぶ時間が少なくなっていると思います。病院に来ても、待合室で黙ってゲームをして待っている子どもが多いです。そういう環境の中で、人に対する愛着パ

講師紹介



新潟県はまぐみ小児療育センター
とうじょう めぐむ
所長 東條 恵 氏

小児科、小児神経科医。大学病院等の勤務医を務め、昭和63年より現職に就任。発達障害児の療育を通じて、数多くの発達障害児支援を行っている。特に育ちの中での親子間コミュニケーションを大切にし、本人支援のみならず、ペアレントトレーニングにも力を入れている。また、近年では児童のみならず、成人期における発達障害の理解と支援について普及啓発活動を行っており、様々な場面で幅広くご活躍されている。著書には『発達障害ガイドブック（以下省略）』『アスペルガー症候群・自閉症のあなたへ』『知っておきたい発達障がいキーワード』等がある。

ーンが幼少期から形成が不十分な子どもは、自ずと対人関係が不安定化していくことが予想されます。

また、子育て支援があらぬ方向に行かないように気を付けなければいけません。子育て支援は、親の都合を満たすのが第一のテーマではなかったはず。愛着形成の臨界期と言われる1歳半までと、その後の3歳までが愛着形成には重要な時期になります。幼児保育、24時間保育、0歳児保育が増えています。親子の愛着形成という点に関しては、それを阻むような流れになっているのが現実だと思います。

行政も現場も、親子が家庭の中で良い愛着関係を築けるように支援していく必要があります。それでも家庭の中で良い愛着関係が保障されない場合、保育や学校現場でそれをどう補っていくかという話になります。不安定な愛着パターンに気づき、「寄り添われる経験」と「寄り添う経験」を社会で保障していくことが大切になります。その中で、前述のコンタクトパーソンの支援は経験の一つになります。

4 ストーリーを描いて支援する

支援を考えるうえでは、（本人が）どのような状況にあると評価できるかを、キーワードを使ってストーリーを描く必要があります。これがないと、場当たり的、型通りの支援になってしまいます。

発達障害児者の社会生活上の問題点は、脳内情報処理の不調から来ています。発達障害の方は、他人の気持ちを読み、調節するシステム（心の理論）や、共感システム、注意・記憶・実行機能といった情報処理システムに、多数派とのズレがあります。そのズレがもとで、感情コントロールが難しかったり、言動にズレが生じたりという風に問題が表面化します。問題が表面化した場合、その前後だけに焦点を当てるのではなく、その根底にある発達特徴から、表面化した問題までの（一連の）ストーリーを描き、どの地点から支援が必要なのかを考えていく

ことが大切になります。発達障害の方は「いつの間にかの学習」が苦手です。そのため、抜け落ちている部分は周りが教えていく必要があります。また、発達障害における支援では、環境調整による「受け取る情報量の適正化」と、「自己評価の向上」が重要になってきます。

5 家族コミュニケーション支援

発達障害児の保護者に対しては、一般的な「褒める」「叱る」ではなく、「褒める」「反応しない」という、感情の落差でもって態度を伝えていくという手法が、ペアレントトレーニングとして用いられることがあります。

しかし、親子の愛着形成ということ考えた場合、このペアレントトレーニングだけに偏るのも問題があります。保護者の中には、どう対応すれば良いかという手法を知りたがる一方、家では子どもがインターネットやゲームに没頭し、家族と遊ぶことがほとんどないという家庭が多数見受けられます。手法の学習も必要だと思いますが、まずは親子間のコミュニケーションを支援していくことが必要だと思います。幼児期での安定した愛着パターンの形成が、成人期における、他者への安定した愛着スタイルの形成につながっていくはず。発達障害支援は、子育て支援です。コンタクトパーソンの支援もそうですが、その基本に「愛着」の観点・「愛着の活性化」を図っていくこと、周りがそのサポートを行っていくことが大切になってきます。

第2部 シンポジウム

どこかと途切れずに繋がっている安心感

（猪股氏）誰かの支えがあることで、自分が取り組んでいることの方向性を確認しながら歩んでいけると。また、どこかと途切れずに繋がっていられるという安心感が、当事者の保護者としてはありがたく思います。それは、親の会でも、サークルでも、その人が参加しやすい場所であれば良いと思います。

NPOの職員としては、「（診断後に）じゃあ、どうしたらいいの？」という具体的な手立てを求める人が絶えません。応えられる場が、もっと多く必要だと思います。早期に、子どもへの理解が始まることで、保護者がいい意味で変わって、親子関係が改善していくと感じます。障害特性によるいろいろな問題は抱えていても、根本的な理解や支援が積み重なることは、とても重要だと思います。お母さん同士のおしゃべり会の場では、「ここなら安心して話せる」といった声が多く聞かれます。お互いに共感できることが、保護者の大きな支えになっていると感

じます。誰かの力を借りるのは、とても大切なことです。幼児期、学齢期だけでなく、思春期や成人期の方への支援についても、つながる場がもっと必要だと思います。保護者一人で、支援者一人で、悩まずに、一緒に考えていける関係性があつたらいいと思います。

福祉施設が地域を巻き込んでいく

（渡部氏）本人・家族の課題を考えるのは当然のこととして、その地域の課題を考えるのも大切だと思います。参考となるのは、高齢者（支援）の仕組みだと思います。高齢者の方では、地域ごとに地域包括支援センターがあり、地域ごとに民生委員がいて、町内会があつてという風に、地域ごとのネットワークができています。

一方で、障害の方はまだまだだと思います。本人の一生涯を考え、親亡き後もどうやって支えていくかを考えたとき、障害とか高齢を越えた、地域での日常的な支え合いがあると良いと思います。

最終的には個人の気持ちがないと続きません。法人や事業所は、法人としての理念や支援の目的を、ぶれずに職員・家族に説明していくことが求められると思います。

今後の支援の方向性

（佐久間所長）支援の対象者や課題の多様化に伴い、現在では必要となる支援も多岐に渡っています。今後、ますます本人・家族を支える方々の連携・協働が重要になってきます。今後の支援では、本人・家族を中心に考えた、「つながる・広げる・育てる・創る」の4つがキーワードになってくると考えます。

これからのアーチルには「生涯にわたる一貫した相談支援機能」と「システム全体のコーディネート機能」の2つの機能が求められます。その人のライフステージや支援状況に応じ、横の関係と縦の関係を繋ぎ、活動のバックアップを行っていくこととなります。

理念を確認することの大切さ

（野口先生）今回のシンポジウムでは、たくさんの貴重な意見を聞くことができました。そんな中でも、支援を考えるうえで何を大事にしていけるかを、我々はきちんと考えていかなければならないと感じました。そして、その理念をみんな確認していくことが、いかに日々の支援にとっても大切かということを改めて感じたシンポジウムになりました。

今回の東條先生の講話やシンポジウムでの話を参考に、また各々の職場や地域に戻り、可能なことから始めて行ければ良いのではないかと思います。



「アーチル」とは「アーチ(arch:橋)」と「パル(pal:仲間)」とをかけたもので、センターが障害のある方と市民の「架け橋」になるようにとの願いを含め、市民公募によってつけていただいた愛称です。

このコーナー「かけはし」は、読者の皆さんとアーチルが双方向で情報交換できるよう、皆さんや職員からのメッセージなどを掲載していきたいと思ひます。



高校情報交換会

生徒の抱える悩みを発達の視点から見直してみませんか？

～高校情報交換会とは～

平成 19 年度からアーチルを会場に開催しています。当時、高校では発達障害のある生徒への支援についての理解がなかなか得られず、一部の先生が孤軍奮闘している現状がありました。そういった先生方の出会いの場を作ろうというのがはじまりです。会を重ねる中で、今では高校の先生方だけではなく、中学校、大学、支援学校等様々な領域で発達障害のある生徒への支援を行っている先生方も参加しており、支援の輪も広がってきています。参加者同士で同じ悩みを共有したり、他校の事情も知り合う等、参加者主体の情報交換・ネットワーク作りの場となっています。

毎年3回程度開催しています。情報交換の内容は参加者の声をもとに決めています。グループでの座談会やフリートークの時間を設け、「発達障害のある生徒の自己理解」、「保護者に対する支援」、「中学校から高等学校への引き継ぎ」等について意見交換を行いました。話し合いの中では、「高校の中で発達障害のある生徒に対する理解啓発や支援体制づくりは進んできているが、中学校から高校への移行支援システムがまだ未整備である。」、「大学や就労機関等との連携がもっと必要。卒後の課題についてフィードバックを受けながら、高校時代に培っておくべきことは何かを、もっと考える必要がある。」、「支援学校のノウハウを活用し、就労等の課題を普通高校の先生と一緒に考えていけないか?」、「本人の課題を保護者と共有しながら支援を進めることが大切。」等多くの意見や課題が挙げられています。

高校・大学では、どのように配慮しているの？

中学校から引き継ぎがあると、高校入学時点からの配慮が考えられるよ。

社会の中で本人らしく生活していくためには、幼いころから、成功体験を通して、自尊心や自己有能感を育てていくにはどうすればいいかを考えていくことが必要なんだね。

一番困っているのは本人たちなんだということをもう一度よく考えよう。



●○関心のある方はアーチルへお問い合わせください。○●

この広報紙の
お問い合わせ先

(発行元) 仙台市北部発達相談支援センター
〒981-3133
仙台市泉区泉中央2丁目24-1

TEL:022-375-0110 FAX:022-375-0142
e-mail:fuk005410@city.sendai.jp
ホームページは→

アーチルで 検索